

二〇一五年十月

本田毅彦編『つながりの歴史学』（北樹出版）抜刷

中国古代の人びととその「つながり」

柿沼 陽平

柿沼 陽平

現代日本の社会問題のひとつに「孤独」がある。「孤独」に関連する社会現象として「無縁社会」「孤独死」「ひとりぼっち」「おひとりさま」「コミュニティの崩壊」などのことばを耳にする機会も増えてきた。これら一連の現象を、伝統社会（村社会やご近所づきあいなど）からの「個の自立」と捉え、「周囲のまなざしからの解放」として肯定的に評価するか、孤独・不安・寂寥といった感情をともなうものとして批判的に捉えるかは、人それぞれである。だが、「孤独」を求め、「個」の主体性を重視する個人主義者がいる一方で、望まぬ「孤独」に苛まれる人びとが少なからずいることも事実であろう。では、いったいどうすれば「望まぬ孤独」の問題を解決することができるのか。

ここで注意すべきは、そのように「孤独」に苛まれる人びとが、必ずしも周囲との「つながり」を完全に欠いているとは限らない点である。そもそもロビンソン・クルーソーのように、たったひとりで孤島生活を営んでいる者は現在ごくわずかである。大半は誰かの建造した建物内に暮らし、誰かの作った商品を使用し、その意味で他者と多少とも「つながり」をもっている。大学生や社会人のなかには、通学・通勤中に携帯電話をいじり、昼飯をひとりで食べ、アルバイト仲間や会社の同僚と距離をとるなど、自分の殻に閉じこもる者も少なくないが、実際には自発的にイベントを企画し、仲間同士の会話を牽引しようとする若者や（横山 2014）、ソーシャルメディアを駆使した「つながり」をもつ者も多い。このように現代社会もなお、多くの「つながり」によってなりたっている。

もっとも、これらの「つながり」はしばしば、現代貨幣経済の発展とともに消え去る運命にあるともいわれることがある。というのも、貨幣経済の発展は従来一般に、既存の家族的・同胞的・人格的な人間関係を破砕し、経済合理的個人主義を助長するものとみなされてきたからである（吉澤 1994）。この考えによれば、人間同士の「つながり」は現代貨幣経済の進展とともに消失してゆくことになる。しかし実際には、現在もなお人間同士の「つながり」は完全には破砕されつくし

ておらず、貨幣経済による人間関係の破砕が一方向的に進行しつづけているとも断定できない (Zelizer 2011, 柿沼 2015)。むしろ最近の研究によれば、貨幣経済はそれ自体が一定の人間関係や慣行の存在を前提とする (塩沢 1998)。この点からみても、現存する人間同士の「つながり」をたんに「滅びゆく過去の遺産」とみることはできない。それどころか、さきほども少しふれたソーシャルメディアの急速な普及により、いまや私たちは従来にない「つながり」のあり方に直面しつつあるといったほうがよさそうである。現に一部の者は、それに順応するだけでなく、それをみずから設計し、それをめぐるさまざまな問題をかんがえようとさえしている (東・濱野 2010)。

このような意味で、人間同士の「つながり」は、たんに消失するというよりも、むしろ従来と異なる形に移行することが少なくないといえよう。そして、それに適さない者が「孤独」を感じる例もあるとおもわれる。要するに「孤独」は、つねに「つながりの断絶」を意味するとはかぎらないのである。

そうすると、各時代・各地域における「つながり」を検討し、それとの対比を通じて現代日本の「つながり」を理解し、よりよい「つながり」のあり方を模索することが、「孤独」などの問題に接近するひとつの方法となりうるのではないか。ここに、「つながりの歴史学」を学ぶ意義のひとつがみいだされる。

しかも、「つながりの歴史学」を学ぶ意義は、もっと深いところで歴史学の本質にもかかわっている。もともと歴史学は一般に、人類の文字の使用前 (先史) でなく、使用后 (歴史) を中心にあつかい (全歴研 2014)、人間相互の「つながり」を媒介・醸成する文字史料を研究対象とする学問である。その意味で歴史学は、歴史上における他者の存在を認め、文字などを媒介とした彼らとの「つながり」を通じて他者理解に努める学問である。よって人間同士の「つながり」は、なによりも歴史学の本質にかかわる重要な研究課題であるといわねばならないのである。このような点を念頭におき、筆者は以前、次のようにのべたことがある。

人と人が何かを交わすという意味での広義の交換 (communication) は、太古よりつづく人類の営為のひとつである。人びとは言葉を取り交わし、こころをくみ交わすのであり、それによって社会というものが形成される。それゆえ、ある時代・地域の歴史を解明しようとするばあいには、そこに存在す



る個別具体的な交換のあり方を検討せねばならない（柿沼 2011）。

そして、この歴史観を交換史観と命名したことがある。これは要するに、人間同士の交換＝つながりに焦点を絞^{しぼ}り、各時代・各地域におけるその多様なあり方を解明すべきであるという主張である。

本章ではこのような問題意識をふまえ、まず中国古代史研究の黎明期より説きおこし、たいへん大まかにではあるが、これまで日本人がなぜ中国古代史研究に注目してきたのかを確認する。そのうえで「つながりの歴史学」の一環として、中国古代の「つながり」に関する学説を回顧・整理し、最後にその議論を今後どう発展させるべきかを模索する。それによって中国古代と現代日本の「つながり」を比較し、よりよい「つながり」を探るための一助としたい。

||||| 第1節 戦前の中国古代史研究

1. 東洋史学の黎明期

そもそも1900年以來の学界では、中国古代史に関して、清朝以前からつづく金石学・古銭学や、いわゆる清朝考証学、もしくは20世紀にとくに急成長した甲骨学・簡牘学・考古学などの成果をふまえた基礎的な研究が積み重ねられてきた。それは、骨董収集や古銭趣味に端を発する金石学・古銭学や、20世紀初頭に生まれたばかりの甲骨学・簡牘学・考古学などを基盤にしているという点で、さまざまな問題をふくむものであったが、「**实事求是**（事実に基づいて正しさを求める）」・「**好学深思**（学問を好んで深く考える）」を旨とする清朝考証学や、レオポルト・フォン・ランケ以降の西洋実証史学の導入にともない、その精度を格段に増していった。

なかでも1930年代における、史料の収集・整理と具体的現象の分析に力点を置くべきことを唱えた中国食貨学派の活躍と（陶 1934）、1970年代以降に飛躍した出土文字資料研究は、基盤研究にさらに拍車をかけることになった。地道に個々の史料考証を行おうとするその姿勢は、まさに清朝考証学と西洋実証史学の融合した、中国古代史研究の特徴のひとつであるといえよう。

ところが一方、多くの研究者はこのような基盤研究とはべつに、それらの成果を統合して中国古代史の大まかな流れを復元することにも、つとに力を注いできた。その萌芽はすでに20世紀初頭より日中両国の学界にみられた。それは、中国古代史の特徴をおおまかに掴もうとする東洋史学黎明期ならではの大胆かつ、ややきめの粗い試みではあったが、そのような先駆者の驥尾に付さんとする後学にとっては恰好の目安を提供するものであった。なかでも内藤湖南以来のいわゆる京都学派と（内藤 1969）、マルクス主義的歴史学を理論的背景とする研究者は、日本の中国古代史研究の二大学術潮流をなすもので、ともに世界史上における中国史の位置づけを明白にせんとする雄渾な志を秘めていた（鈴木・西嶋 1957、谷川 1993）。

2. 唯物史観の台頭

この二大学術潮流のうち、最初に世界的な論争対象となったのはマルクス主義歴史学のほうであった。すなわち、中国では1927年に、蔣介石らに対する中国共産党の武装決起が失敗したため、共産主義者を中心に、これまでの中国史とそれに基づく現状認識、そしてそれらをふまえた社会主義革命の方向性を今一度問い直そうという気雲が高まっていた。その一環として中国史の体系的な理解が求められ、いわゆる中国社会史論戦の火蓋が切って落とされた。これは、社会主義革命にいたるまでの歴史的過程を“生産様式の展開過程”として整合的に跡づけようとしたもので、基本的にマルクスの唯物史観に依拠したものであった（Marx 1859）。

これは従来、あらゆる歴史的世界が上部構造（政治的・法的制度や社会的意識諸形態）と下部構造（生産諸関係）よりなること、後者が前者のあり方を規定していること、後者の内的矛盾によって歴史が発展することなどを意味するものとして多くの歴史学者に受容され、当時の中国に「中国史＝中国における生産様式の展開過程」という理解を定着させた（以下、唯物史観）。その後、西欧マルクス主義者のグラムシやアルチュセールらによって下部構造の絶対的優越性を相対化する試みがなされ、日本でも吉本隆明の共同幻想論などが下部構造決定論に歯止めをかける役割をはたしたようであるが、中国古代史学の方野では下



部構造を重視する古典的な唯物史観^{ゆいぶつしかん}が依然として力をもちつづけた。

こうして唯物史観論者のあいだでは、各時代・各地域の生産様式を把握することが科学的歴史学の課題とされ、各生産様式における支配者（たとえば奴隷主や会社社長）と被支配者（たとえば奴隷や社員）との階級間の矛盾が新時代を生む原動力になるとされた。そして歴史上の支配—被支配関係を曝^{あば}き、被支配者側の生を発掘・提示し、よりよい未来への道筋を探ることが、歴史学者の責務とされた。

このような傾向は、毛沢東^{もうたくとう}ひきいる中国共産党の勢力増大にともない、中国の歴史学界全体に普及していった。これを歴史理論としてさらに定式化したのが「世界史の基本法則」であった。これは、世界各地の歴史が遅かれ早かれどこも同じ発展段階をたどって成長してゆくとする主張で、かのソビエト連邦のスターリンによって定式化された考え方である。

もっとも、そのような唯物史観に則った研究者の多くは、中国が「世界史の基本法則」から取り残され、欧米列強や日本に遅れを取っている現状を説明するため、アジアの特殊性や後進性を「唯物論的＝科学的」に解明するの^{やっ}に躍起になっており、しばしば実証をとまなわな^きい理論的論戦に陥っていた。その過程で、ドイツのウィットフォーゲルやソ連のマジャー^マールの研究に注目が集まった。このころの学界動向に関してはすでに多くの研究史整理の論文が出されている（西嶋 1961, Dirlik 1978, 増淵 1996, 福本 2002）。

このような理論的論戦に対して、一部の研究者は基礎的な実証研究の意義をあらためて強調して中国食貨学派などを結成したが、その後も生産様式論争自体は継続された（張 2003, 羅 2004）。中国では現在そのような方向性は多少是正され、多様な研究が出現しつつあるが（楊・徐 2010）、唯物史観の影響はなおも小さくない（歴研 2007）。

3. 戦前・戦中日本の中国古代史研究

一方、戦前の日本では、江戸時代の本居宣長^{もとのおりのりなが}以来の否定的中国観に加え、脱亜思想^{だつあ}（ひいては、アジアのなかで日本だけが西欧化＝近代化に成功したとする考え）の高まりや、それにつづく日清戦争の勝利などを経て、徐々に中国に対する侮蔑^{ぶべつ}

かん まんえん ▶²
感が蔓延しつづあった。そして西欧列強に植民地化されたアジアを解放し、それを代わりに日本が牽引すべきだとの論調も強まっていた。このようななかで多くの知識人は、アジアとの友好的な連帯^{れんたい}を重視して欧米列強に立ち向かうべきだとする興亜思想^{こうあ}を、脱亜思想に吸収させ、しだいに日本によるアジア支配を強調するようになっていった。

これは裏を返せば、日本以外のアジア諸国が外国の支援なくしては近代化できないこと、それらのなかに近代化を妨げる社会的要因があることを前提とする。このような後進的アジア像は本来、日本を含めたアジア諸国に対し、欧米列強が抱いていた考えであったが、アジアでいち早く近代化に成功した日本はそれと似た考えを中国に抱くようになっていた(子安 2003)。こうして日本でも、ミルやヘーゲル以来の停滞史観^{ていたいしかん}が幅をきかすことになり、津田左右吉^{つだそうきち}のシナ研究や(津田 1965)、ウィットフォーゲルの水力社会論^{すいりよくしゃかいろん}などが、その理論的支柱となった。

しかも、1930年前後の中国におけるアジア的生産様式論争^{ほっぼつ}の勃発は、日本の学界にも少なからぬ影響を与え、上記の停滞史観をさらに助長させることにつながった。生産力という単一の尺度によって歴史を切り分ける生産様式論は、当時の中国の生産力が日本に劣っているという事実を背景とし、「中国がいかにも日本より近代化に立ちおけているかを「科学的に」立証」するものとして日本のナショナリストに支持されるとともに、そのような「停滞的アジア」の解放をめざす日本のマルクス主義者にも支持された(竹内 1966)。むろん戦前日本の中国史研究のなかには、実際には「アジア的共同体論」や「停滞論」の語で一括しえない成果も少なくなかったが(岸本 2006)、ともかくこのようにマルクス主義者と日本のナショナリストとのほざまで停滞史観が戦前・戦中に命脈を保ちつづけたのはたしかである。

|||||| 第2節 戦後日本の中国古代史研究

1. 停滞史観に対する批判

第二次世界大戦が終わると、戦前の中国史研究は急速に見直されていった。



とくに戦国秦漢史の分野では、文献史料に基づく実証研究が蓄積されるとともに、居延漢簡をはじめとする出土文字資料にも注目が集まり、一字一句にわたる実証研究が進んだ（柿沼 2013）。

それと並行して、中国史をたんに停滞の歴史とみなすのではなく、なんらかの進歩・発展を内包する歴史とみる史観が台頭した（停滞史観批判）。その背景には、日本の帝国主義こそが中国史を一時的に停滞せしめたとの反省もあった（田中 1973）。本来、戦前・戦中の中国史研究は少なからず多様性を内包していたが、戦後になると、それらは停滞史観の名のもとに一括して断罪されることが多くなり、戦前・戦中日本における中国史学と対外侵略との「共犯関係」が執拗に批判されていった。

その嚆矢となったのが、西嶋定生の初期の研究と、それをふまえた歴史学研究会大会の西嶋報告であった（西嶋 1983a, b）。唯物史観を標榜する歴史学研究会は、戦中に弾圧された反動から、戦後とくに大きな影響力をもつようになり、西嶋はその中心的論客のひとりと目されていた。ちょうど1949年には中華人民共和国が建国され、中国でも唯物史観が有力視されていた。よって、1950年代には、日中両国で唯物史観に基づく中国古代史研究が推進されたことになる。

戦後日本の中国古代史研究の口火を切った西嶋が注目したのは、中国史の特徴である皇帝制度であった。すなわち、なぜ中国にはたったひとりの皇帝が権力をもつ体制が生まれたのか。その起点たる秦帝国や漢帝国はいかに形成されたのか。中国独自の生産様式を理解するには、それを支配・統制する中国独自の皇帝制度のありようを解明せねばならない、と。

なるほど前節でのべたように、唯物史観では、各生産様式内の支配階級と被支配階級（たとえば皇帝と豪族、皇帝と小農民、豪族と奴隸など）とのあいだの矛盾が新時代を創造するきっかけになると捉える。よって、停滞史観批判を標榜する唯物史観論者にとり、秦漢帝国の形成は重要な論点であった。

2. 秦漢帝国論争

こうして生じたのが、いわゆる秦漢帝国論争である。堀敏一はその経緯を、

①大土地所有の経営が奴隸制か農奴制（もしくは小作制）かを問う段階、②皇帝

と小農民の関係を問う段階、③国家と農民とのあいだに介在し、農民の存立を保障し、国家支配を可能にする「共同体」のあり方を問う段階に大別している（堀 1977）。ほかにも当該論争の争点は多岐にわたる（東 1993）。

また秦漢帝国論争は、秦漢時代の強力な皇帝権力がそれ以降も存続したか否かというべつの問題も生み、後漢を豪族政権と捉える論者や、魏晋南北朝を貴族制

社会の時代と捉える論者、あるいは唐代以前の皇帝権力を一貫して強力とみる論者のあいだで、いわゆる時代区分論争を巻き起こした。そのなかでも、後漢豪族や魏晋六朝貴族制をめぐる論争史に関しては、すでに詳細な学説史整理がなされている（越智 1962、葭森 1981、都筑 1981、初山 1984、小尾 1983、小嶋 2009、中村 2013b・c、小嶋 2014、川合 2015）。

その詳細はともかく、ここで重要なのは、少なくとも当該論争のなかの、大土地所有の経営が奴隷制か農奴制（もしくは小作制）かを問う①の段階と、皇帝と小農民の関係を問う②の段階が、いずれも唯物史観の色濃い影響下にあり、やはり秦漢帝国下での支配—被支配関係を中心的論題としており、民同士の「つながり」が積極的に描かれることが少なかった点である（図1-1）。では、①②以前に「つながりの歴史学」へとつながる萌芽的研究がなされたことは皆無であったのかといえ、そうとも断言できないようである。その点をつぎに確認してみたい。

3. 民衆社会への注目①

戦前の中国史研究をあらためて詳細に回顧してみると、「つながりの歴史学」にいたる萌芽をいくつかみいだすことができる。

すなわち、幕末の勝海舟をはじめ、中国における政治と社会との距離をみてとり（いわゆる遊離論）、そこに政治権力の変動や国家の興亡に左右されない中

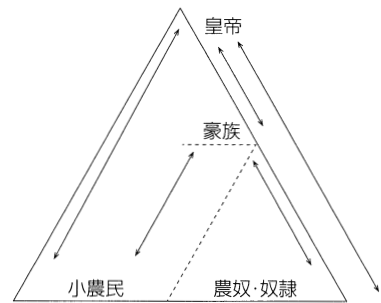


図1-1 秦漢帝国論の主要争点
（おもに共同体論争以前）



国民のしたたかさや自活・自治・自衛の力をみてとる論者は、従来必ずしも少なくない。もっとも、そのような遊離論は社会（人民）の国家に対する影響力を軽視し、中国人民による主体的な社会変革の可能性を等閑視するものでもある。その意味で遊離論は、たしかに停滞史観と結びつきかねない危険性をも孕んでいた（松本 1948, 1949, 1977, 尾形 1979）。とはいえ、それによって民衆社会にはじめて光が当てられるようになった点もみのがせない。

このように民衆社会に焦点をあてた中国古代史研究のうち、その戦前における高峰として、あらためて京都学派の遺産に注目される。本章第1節でも紹介したように、戦前の中国史研究には京都学派とマルクス主義史学の二大学術潮流があり、最初に世界的注目を集めたのはマルクス主義史学であった。これは、京都学派の学問が安易な理論化を峻拒する性質をもち、しかもその内容が中国史研究に特化したもので、英語圏への翻訳にも時間を要し、欧米発の着想でもなかったためである。だが実際には、京都学派的発想は現行の中国史研究につながる発展可能性を含んでいた（とくに欧米では近年、京都学派の切り拓いた唐宋変革論や宋代以降の士大夫・科挙研究等の関連研究がめざましい）。

そこには、中国社会の根底に、個人でなく郷団（同姓親族の発達した組織）をみいだす内藤湖南の研究以来（内藤 1972）、家族的紐帯に関する桑原隲蔵「中国の孝道」や（桑原 1968）、情義に基づく人的紐帯に関する宮崎市定「游侠に就て」（宮崎 1991）など、「つながりの歴史学」への洞察も含まれていた。とくに内藤の郷団論は、のちの明清地域社会論（後述）へとつながる一連の中間団体論（国家と個人のあいだに存在する宗族・村落・ギルドなどの集団を総称する抽象的概念に関する諸説）の先蹤ともいわれる（岸本 2006, 2012c）。

また京都学派の業績とはべつに、中国史上の相互扶助慣行に関する清水泰次の研究や（清水 1921）、諸橋轍次・加藤常賢・牧野巽以来の中国古代家族・宗族史研究も（加藤 1940, 諸橋 1975, 牧野 1979）、「つながり」に関係する学説として留意を要する。加えて、次項で紹介する3研究にも注目される。これらは1960年代以降に「つながりの歴史学」が急速に展開される前触れともいえるべきものであった。

4. 民衆社会への注目②

第一に清水盛光の研究(清水 1951)。清水が戦前所属したいわゆる満鉄調査部は『中国農村慣行調査』でも知られる中国村落研究の一大拠点で、清水も中国大連駐在中に現地の郷村社会と接し、戦前中国郷村社会の理解へと向かった。清水は、皇帝を頂点とする東洋的専制社会の根底に村落共同体があるとし、戦前中国の村落共同体内の人びとが個としての自覚をもたず、むしろ共同体の一員もしくは被支配者として暮らしていたとする。このような戦前中国郷村社会に対する見方はその後多くの批判にさらされたが(旗田 1973)、ともかく清水自身はそのような見方をふまえ、戦国秦漢時代における郷里社会内の相互扶助的慣行へと研究の歩を進めていった。そして、当時の士人階級が家族道徳を重視し、郷党意識(地縁的共同意識)を軽視する一方で、民間では相互扶助慣行と根づよい郷党意識がみられる点などを指摘した。

第二に増淵龍夫の研究(増淵 1996)。増淵によれば、春秋戦国時代になると周王朝の秩序は乱れ、戦乱のなかで伝統的な氏族制の邑共同体(血縁者が集住する邑)は崩壊しはじめた。そのなかで士(卿・大夫の家臣)は浮動的な遊民層となり、説客や任侠となった。ここでいう任侠とは、民間で私剣蛮勇を振るい、私交を結んで徒党を組み、宗族知友を侵す者には復讐し、犯罪や生命の危険を犯してでも節義をたてることを重んじ、信頼と声望を集める者のことである。増淵は、この任侠の習俗が氏族制に代わる新しい人的紐帯になったとし、それを家父長制的家々の周辺のさまざまな社会層にみだしていった。

第三に宇都宮清吉の研究(宇都宮 1967, 1977)。これは京都学派の成果のひとつで、「共同体」に関する学説史的潮流と直接にかかわる。それによると皇帝と民の支配—被支配関係を考える場合、従来は民が本来的にもつ「ゲマインシャフトリッヒな生活組織」を等閑視しがちであった。ここでいう「ゲマインシャフトリッヒな生活組織」とは、近代西欧でゲマインシャフト(地縁や血縁、友情で深く結びついた、自然発生的・有機体的な共同体)からゲゼルシャフト(利益や機能を第一に追求する機械的な集合体)への移行が発生したとするテンニエスの二分法をふまえた語である(Tönnies 1887)。そこで宇都宮は、秦漢帝国が民を個々に支配していたとみるのではなく、帝国支配の根底に個々の家族(とくに父母・妻



子・兄弟のいずれかを含む三族制家族)の存在をみだした。それによると秦漢時代の家族は、宗族(同姓の父系集団)やそれよりも遠縁の人びと(九族・郷党)よりなり、有力で徳のある三老(教化を掌る郷官)が彼らをひきいた。内部では人びとが孝(人間的自覚に基づき父母を養う精神)をもって父母などに接した。漢帝国がそこに介入して民を単一的に支配するのは容易でなく、ゆえにやがて儒者を重用し、彼らを媒介として郷里支配を行なうようになった。だが天候などの諸条件によって家々に経済的格差が生じると、皇帝支配を阻害する豪族が出現し、漢帝国は崩壊した。以上が宇都宮の見方である。

5. 「共同体」論への道

以上の諸説のうち、まず清水説は経書と史書の双方を史料の根拠とするため、そこで提示された「つながり」が儒学的理念か歴史的現実かで検討の余地を残す。また中国村落史研究はその後、戦国秦漢時代の郷里が自然村か行政村かをめぐる論争へ発展し(池田 2002)、里民同士のさまざまな「つながり」への関心は相対的に希薄化したようにみえる。

つぎに増淵説も、秦漢時代の皇帝支配がむき出しの暴力的上下関係でなく、支配者一被支配者間の人格的な関係に裏づけられていたことを指摘したものととして学界に受容され(谷川 1987)、戦国末～漢初の共同体と土地との関係に関する論争を活性化させた(好並 1978, 多田 1999, 堀 1970, 1977)。しかしその後、それによってすぐに任侠と他の「つながり」との関係についての総合的研究が発展することはなかった。

最後に宇都宮説も、戦国秦漢時代の家族(三族制か、1口5人程度の小家族)をめぐる論争や(飯尾 1985a, 小寺 2008, 鈴木 2012)、豪族(皇帝の人民支配を妨げる要素か、郷里秩序の担い手か)をめぐる論争へと展開し(初山 1984)、必ずしも定説として無批判に受容されたわけではなかった。また宇都宮が「ゲマインシャフトリッヒな生活組織」を強調するあまり、民間社会に伏在する上下関係や矛盾対立関係を等閑視しすぎている点にも疑問は残る(松本 1948, 1949)。

ただし、清水・増淵・宇都宮が民同士の人間関係につとに着目していたことは事実である。それは、従来の家族・郷里に関する経学的・制度史的・法制史

的研究とは異なり、あるいは国家・郷里・家族内に支配—被支配関係をみいだす研究とも異なり、民同士の「つながり」を主題とする研究の萌芽であった。

このような研究動向のなかで生じたのが、川勝義雄と谷川道雄を旗手とする「共同体」論であった。それは秦漢帝国を支える民同士の「つながり」を本格的に主題にしたものと評せる。

それによると、まず春秋戦国時代に氏族制的邑共同体が崩壊したのち、自立した小農民たちがあらたにフラットな里（上下の階級構造のない里）を中心とする「共同体」を再編した（里共同体）。それは後漢末になると、地方名望家の豪族にひきいられるようになり（豪族共同体）、豪族はみずからの名望を保つためにも私利を抑えて里人をいたわり、里内の共同性を支えようとした。こうして豪族は、乱世の後漢末に相互扶助的な郷里社会を担う指導者となり、のちに貴族へと転身していったという（川勝・谷川 1970, 谷川 1976, 川勝 1982）。

これは、「共同体」内に個の自覚なく埋め込まれた民の姿をみる清水説や、人格的關係を支配者—被支配者間の關係の支えと解する増淵説とは異なり（谷川 1987）、祭祀・自衛・生産等々にさいして取り結ばれる民同士の人格的な關係を高く評価し、私利に抗し相互扶助を体现する地方名望家を「中国中世」の創造主とする説である。このように地方名望家を「中国中世」の主役とみる点自体は、内藤湖南や岡崎文夫以来の京都学派の見方に即したものであった（内藤 1972, 岡崎 1954）。

6. 「共同体」をめぐる論争

以上の「共同体」論には、おもに唯物史観の立場から、すぐ批判が寄せられた（重田 1975, 木全 1970, 渡辺 1970, 堀 1971, 菊池 1971, 田中 1972, 好並 1999, 多田 1999, 堀 1970, 五井 2002, 藤家 1989など）。

曰く、あまりにも下部構造（経済的基盤）の歴史的因果關係への影響を軽視しすぎて、唯物史観に反する。唯物史観に反する以上、その史観は科学的でなく、歴史上の因果關係を把握できず、中国史と他地域史との比較も困難で、世界史への展望をも欠く。「共同体」内の横のつながりを強調することは、歴史上存在した縦のつながり（支配—被支配關係）の軽視・隠蔽につながる。皇帝を頂点



とする専制国家権力が中国史上脈々と厳存^{げんそん}していた事実を無視している。中国史がもつ反帝国・反封建（地主的土地所有反対）の闘争史としての価値を否定するものである。それは貴族と民、豪族と民、もしくは民同士の関係に含まれる上下関係や確執^{かくしつ}・矛盾を軽視するもので、あまりにも理念的・理想論的である等々。

これらに対して川勝・谷川も当然すぐに反論を加えた（谷川 1987, 川勝 1993）。「歴史を階級支配の基礎としての私有制の発展史というパースペクティヴのみでとらえそれを近代に接続しようとする戦後の発想」（谷川 1987）を批判する川勝・谷川にとって、上記の諸批判は到底受け入れがたいものだった。結果、いわゆる「共同体」論争³が勃発^{ほっぱつ}し、1980年代ごろまで活発な議論が行なわれた。その論争を経て、漢代豪族の位置づけ、漢代豪族と魏晋貴族との関係性、私有制・非私有制の歴史的意義づけなどが課題として残された。

このように「共同体」論の争点は多岐^{たき}にわたり、現在もなおその是非を論ずることは容易でない。谷川自身は1980年代以降も自説^{ほくしゆ}を墨守⁴しつづけ、一定の支持者もいるが（奥崎 1999）、むしろ最近の学界動向を鳥瞰^{ちようかん}するかぎり、全体的には「共同体」論に無関心な研究が増えているようにもおもわれる。

なるほど、私たちはいまや、停滞史観に従うことはもとより、単線的（世界史の基本法則）にせよ、複数の路線に沿うにせよ、人類の歴史が不可逆的に進歩を遂げてきたとの史観（発展史観、進歩史観）にも、安易に従えなくなりつつある。岸本美緒^{きしもとみお}が総括するように、「今日の問題は、「発展」か「停滞」かというよりは、従来の停滞論と発展論とをともに支えてきたこの本質論的な枠組の妥当性^{いかん}如何に存すると思われる。その枠組を体現する根本的な歴史イメージ——内的潜勢力の一種の開花を通じて漸次的・向目的的・非可逆的に本来進行してゆくべき変化としての発展の観念、およびその背後にある実体としての社会観——それこそが、懐疑の対象となっているのである」（岸本 2012a）。

その背景には、従来「発展」や「進歩」の指標となってきた「幸せ」や「豊かさ」の指示内容の多様化があろう。その意味で、確たる理想的な未来像を描く困難さや、そこへいたる因果関係の把握の困難さに直面する私たちからすれば、民衆の自生的・自律的な団結力（共同体）を歴史の動因とみる谷川・川勝

の主張がやや過剰に牧歌的に響くのも無理はない。また戦国秦漢時代（とくに前漢時代以前）にかぎっていえば、川勝・谷川が漢代社会をフラットな里（上下の階層構造を含まない里）と捉えた点は、すでに実証的に批判されつくした感もある。⁵

7. 「共同体」論から地域社会論へ

とはいえ、川勝・谷川が戦国秦漢時代の「つながり」や「共同体」に焦点をあてた点自体は、以下にのべるように、なお軽視できない可能性を有する。すなわち川勝・谷川の「共同体」論は、戦国秦漢時代の郷や里のような実体的行政区分に関する議論のみならず、むしろ柔軟で茫漠^{ほうぼく}とした「地域社会」を主題とする議論に継承され、ゆたかな研究成果を生み出している。宗族・郷党を概括する実態概念としての「郷里社会」を「共同体（人格を中心とする社会の結合原理）」の具現形態であるとする谷川自身は、「共同体」論と「地域社会」論の相異を強調するが（谷川 1999）、後者が前者の延長上に浮上してきたのはたしかである。

とくに1980年代に明清時代地域社会論^{ひつげやく}の火付け役となった^{もりまさお}森正夫は、「階級的矛盾、差異^{はら}を孕みながらも、広い意味での再生産のための共通の現実的課題に直面している諸個人が、共通の社会秩序の下におかれ、共通のリーダー（指導者、指導集団）のリーダーシップ（指導）の下に統合されている地域的な場」を「地域社会」と定義する。そして地域社会論の課題として、「対立し、差異をもつ諸個人が、他方で統一され、共同している、その統一・共同の契機に、意識の領域をも含めて注目しながら、地域的な場をとらえ、（中略）対立物の統一の契機・構造を、意識の領域をも含めて、徹底的に考えてゆくこと」をあげる（森 2006）。その根底には、個人と個人が出会い、相互に接触をくり返しながら社会関係網を形成する過程と、社会統合を生み出す磁力への興味関心があるようにみうけられる。

その後、森の提言はさまざまな形で継承・展開された。1980年代以降の関連研究については、森（2006）自身が文献目録を作成している。なかでも地域社会論の代表的論客のひとり^{もく}と目される^{きしもとみお}岸本美緒は率直に、「私と大同小異の限



られた知識しかもたない無数の人びとが、それぞれに行動しながら、ある程度の秩序ある社会を作り、その安定性にあまり疑いを抱かず生活できている」ことへの驚きを表明し、「社会の片隅で選択する個々の人々の行動、その集合が社会だ、という視点から、なぜ人々はこのように行動するのか」、「私と同様に社会の全体に対する不透明感覚を抱いている人間たちが、どのように手探りで社会を作りあげていったのかを見てみたい」とする（岸本 1999）。これは、地域社会論の核心のひとつを的確に抉りだしたものと評せる。

岸本が指摘するように、川勝・谷川の「共同体」論も、それと同様の観点から再評価できる。すなわち、たとえ戦国秦漢時代に「フラットな里」などなくとも、その逆に、戦国秦漢社会がドミノ倒しに解体や崩壊をしなかったのも事実である。よって、やはり戦国秦漢時代に一定の秩序が生じる因果が問題となる。たとえば唯物史観のように、功利的・闘争的な人間像を前提とする場合、このことはさらに難問となる。それは「万人の万人に対する闘争」からいかに秩序が生まれるかを問うたホブズ以来の難問と化す。

以上の問題意識に基づく地域社会論は、「秦漢帝国による統一的・画一的な支配」という歴史像を批判して、帝国内の地域性を考えようとするいわゆる「地域史研究」とは似て非なるものである。ここに、唯物史観全盛の1960年代にあえて「共同体」の存在を強調した川勝・谷川の問題提起の意義が認められる（岸本 1997）。

裏を返せば、それは、人間のもつ功利的・闘争的な側面のみを強調するのではなく、むしろ人間同士の共感・博愛心の重要性に注目したアダム・スミスや（Smith 1759）、歴史にみられる非私有制の意義に着目したマルセル・モースの問題意識とも通底するであろう（Mauss 1925）。ちなみに現在では、人間同士が意識以前の基本的なレベルで互いに共感し深く結びつくためのミラーニューロンを脳内に有することや（Iacoboni 2008）、人間相互の信頼度や道徳性を高めるホルモンを有することが知られている（Zak 2012）。これらの点からみても、谷川・川勝の説はたんなる牧歌的観念論を越える可能性を秘めていると再評価できよう。

||||| 第3節 「つながりの歴史学」とそのあらたなる可能性

1. 「つながり」の重要性

以上の学説史整理によると、中国古代史研究の分野ではつとに郷里社会や「共同体」が議論の俎上^{そじょう}にあげられ、さまざまな角度から検討が加えられてきた。なかでも「社会の片隅で選択する個々の人びとの行為」を起点とし、そこから社会秩序の生まれる因果関係と過程を描こうとする岸本美緒^{きしもとみお}の問題意識は、今後の中国古代社会史研究にとっても示唆^{しきょ}に富む。私たちはいまや、経済合理主義的人間像を前提とすることなく、特定の未来像を終着点とすることもなく、生産史観・階級闘争史観・停滞史観・発展史観などとは切り離された形で、「共同体」や「地域社会」に注目すべき段階にきている。しかも、それをたんに静態^{せい}的^{たい}でゲマインシャフト^{ないてき}リッヒな集団とみるのではなく、そのあらわれ方と、そこに内包される不協和音^{ふきょうわおん}にも耳を傾けつづけねばならない。

そこであらためて「共同体」・「社会秩序」・「地域社会」などとよばれる集合体の構成要素に着目すると、その根底にはさまざまな人びとの「つながり」がみいだされる。換言すれば、特定の間人集団を因数分解していった先にみいだされるのは、単子的な個々人^{モナド}ではなく、複数の人びとによる「つながり」であるということである。実際に、「共同体」は「共同」する人びとの訳語で、ラテン語の *communis* (共通の) に由来し、「社会秩序」の「社会」もラテン語の *socius* (仲間) に由来し、ともに「個人」や無秩序の集団とは区別される (Williams 1983)。共同体や社会の類義語として仏教用語に由来する「世間」もあり、非常に幅広い意味をもつ (井上 2007)。これらのことばの語源・意味・ニュアンスはどれも相異を含むが、重要なのは、それらがどれも人びとの「つながり」を前提とする点である。前述の共同体論・地域社会論・社会秩序論の描く歴史的世界の背景には、このように人びとの「つながり」があったのである。

ここでいう「つながり」とは、たんに親和的・友好的な紐帯や連帯のみでなく、いがみ合いや対立関係を含む幅広い人間関係のことである。もし「つながり」ということばが親和的イメージのみを喚起^{かんき}しやすいのであれば、広く「コミュニケーション」といいかえてもよいが、本章ではとりあえず「つながり」



の語を採用する。

このような理解をふまえ、戦国秦漢時代の人びとの「つながり」に目を転じてみると、先行研究では「つながり」の具体的な時代的特性に関する議論がやや少ないようにみうけられる。たとえば川勝・谷川の「共同体」は、自己抑制の倫理に基づく人びとの「つながり」を意味する。だがそれは、岸本ものべるように、かならずしも中国中世特有の倫理体系とはかぎらない（岸本 1997）。現代日本でも、良好な仲間関係を築く場合、自分より他人を優先する者は少なくない。その意味で今後は、戦国秦漢時代特有の「つながり」の具体的な内容が問われねばならない。

2. 行為と社会システムの関係

この問題を解くうえで、あらためて注意を喚起しておきたいのは、「つながり」がたんなる「社会の片隅で選択する個人々の行為」の集積とはかぎらない点である（富永⁶ 1995）。筆者は基本的に岸本の問題意識をうけつぎつつも、唯一この点に関してのみ、岸本説とはやや道を異にするようである。

すなわち、そもそも人間同士の「つながり」には、既述のとおり、親和的・友好的な紐帯ちゆうたいや連帯れんたいのみでなく、いがみ合いや対立関係も含まれる。そこには、文字・電話・インターネットなどによる狭義のコミュニケーションのみならず、多種多様なことば・心・物の交流や、一方通行的な贈与などのコミュニケーションも含まれる。そしてこれらのコミュニケーションに基づく人間同士の直接的・間接的な「つながり」は、あたかもブラジルで蝶が羽ばたくとテキサスで竜巻が起こるごとく、相互連鎖する網となって、広範に私たちの日常を覆っている。

その過程で、人間関係はたえず更新され、歴史上の「社会」が形づくられる。それは、なんらかの意図を帯びて伝達された相手と相手に「理解」される過程よりなる。そのさいに、発信者の伝えたいことが受信者に正確に伝わらない場合もあり、発信者はそのつど修正を図るかもしれず、それがべつの誤解を生む可能性もある。このように「つながり」のもつ意味解釈は、その場で瞬間的に確定するとはかぎらない。現実的な「つながり」は、双方の正確な理解の有無にか

かわらず、相互主観的關係のなかで構成され、相互間にズレやゆらぎを含みつつ、受信者の情報の解釈・処理を通じて連鎖する。

よって、個々の「つながり」の事例をいくら観察しても、その内容や意義を客観的に見定めることは容易でない。個々の「つながり」(部分)はその前後の「つながり」(文脈)と不可分で、社会全体から切り離して検討することも、そのたんなる総和(そうわ)を社会全体とみることもできないからである。その意味で、「社会の片隅で選択する個々人の行為」を社会的文脈から切り離して考えることはできない。むしろ、個々の行為に対する検討を積み重ねるよりも、はじめから人びとの「つながり」のもつ意味を、極力細分化せずに理解するシステム論的な努力が必要である。

3. 歴史学の可能性①——「つながり」とその規律

ではいったい、どのように戦国秦漢時代特有の「つながり」の意味内容をシステム論的に検討すべきか。本章では最後に3つの考え方を「歴史学の可能性」として提示し、諸賢(しよけん)の御批判を仰ぎたい。

第一に、各「つながり」や各「行為」の事例を個別に切り分けて考えられない以上、「つながり」全体の特性や意義を極力細分化せずに把握する方法が求められる。このように「つながり」全体に着目する場合、個々の人間は「つながり」の結節点(しよげん)にすぎない。これは人間存在を軽視する見方ではなく、人間の主体性が「社会」に影響を与えないという意味でもなく、むしろ人間を「社会」のたんなる歯車とはみなさないということを意味する。それはいわば、従来の社会学者・歴史学者が「川」の「水」よりなる点を重視し、「水」の集合を「川」とみるのとは異なり、「川」に「流れ」がある点を重視し、「水」を「流れ」の前提条件とし、「流れ」のほうを重視する主張である(図1-2)。

そのとき重要なのは、「流れ」を組織化している規律(きうり)の存在である。たとえば、見知らぬ人同士の交換や取引は本来生じにくいはずだが、現在日本には貨幣を媒介とした「つながり」が持続的に成立している。それを支えているのは貨幣をとりまく規律である。この規律は、ひとりの人間が作りつづけているものではない。また一部の人びとがその輪から離脱しても、すぐにその輪自体が

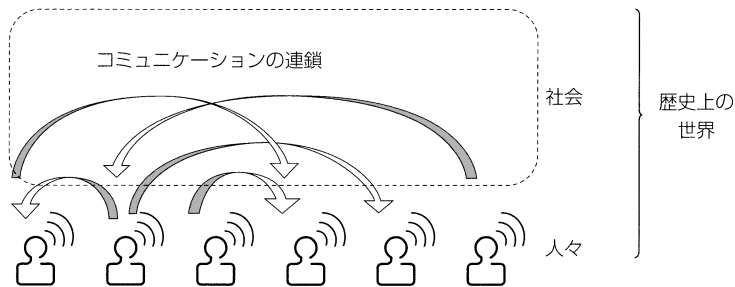


図1-2 「つながり」と「社会」の関係

消滅するわけでもない。それはいわば「つながり」の場を支える暗黙の共通了解であるとともに、それによって新たな「つながり」を生成する契機ともなっている。その類例として、宗族・国籍・郷里（現住地・出身地）・貨幣・性別・爵位・華夷の別などによる規律があげられよう。

すると、歴史上の「つながり」を細分化せず理解・叙述するには、それを支える規律に注目することが重要となる。ただしここで注意すべきは、これらの規律が必ずしも可視的・固定的・実体的な対象ではない点である。これらの規律は、「つながり」があらたな「つながり」を生む過程で、たえず修正を迫られる。規律は「流れ」の定常状態ていじょうを示現するものの、そこにはゆらぎもある。このような現象を把握するうえで必要となるのは、いわゆる複雑系ふくざつけいのシステムに対する視点であろう（塩沢 1998）。

また「つながり」の規律は、既述のとおり、各時代・各地域にそれぞれ一種類しかないわけではない。各時代・各地域の歴史は、多様な規律とそれに基づく複数の「つながり」に彩られており、その組み合わせにこそ一定の時代性と地域性が反映されている。たとえば戦国秦漢時代には、爵位制度に基づく人間関係や、家族的・親族的な人間関係、市場原理に基づく商売上の人間関係、任侠の心性に基づく人間関係等々、複数の規律に基づく「つながり」が並存・混在していた。このような各時代・各地域特有の「つながり」をおおまかに把握することが、中国古代史研究において「つながりの歴史学」を展開するうえで第一の課題となろう。その研究例として柿沼（2011, 2015）があるほか、近年

では柿沼（2011）の提言をふまえた濱川（2013）や楯身（2014）などがある。

4. 歴史学の可能性②——「つながり」を生きる個人

第二に、各時代・各地域の歴史がさまざまな規律とそれに基づく複数の「つながり」に彩られていたとすると、そのなかで個々の人間が具体的にいったいどう生きていたのが別途問題となる。第一の課題は戦国秦漢社会の全体的理解につながるとはいえ、それだけでは戦国秦漢時代の個々人の息吹を感じ取ることはできない。むしろ「社会」をたんなる「個の集合」とみず、「つながり」と「社会の片隅で選択する個々人の行為」とのあいだに断絶をみる本章の立場（前掲のシステム論立場）からすれば、第一課題と第二課題は論理上断絶しており、両者は別々に検討されねばならない。その意味で第二課題は、第一課題の欠を補うものである。

そこで歴史上の個々人に目を転じると、彼らが諸規律を下敷きに、さまざまな「つながり」の網の目のなかで暮らしている情景が目浮かぶ。このとき注目すべきは、彼らがそれぞれなんらかの単一の「共同体」に属していたというよりも（図1-3）、むしろ複数の「つながり」（たとえば宗族、郷里社会、性別、出身地、在籍地、身分、華夷秩序など）に同時に帰属していた点である（図1-4）。これは、特定の「つながり」単体に焦点をしぼり、その結合原理・生成過程・内部矛盾の解明をめざす先行研究とは異なり、複数の種類の「つながり」に帰属する個人のありように焦

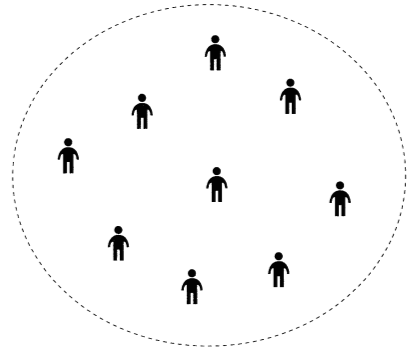


図1-3 従来の共同体論モデル

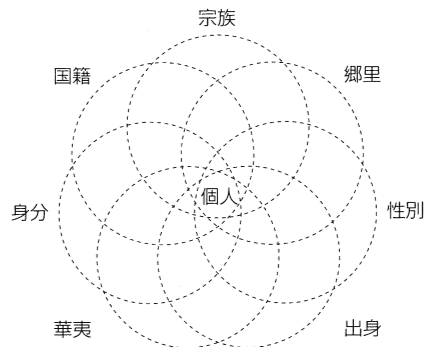


図1-4 複数の「つながり」モデル



点をしぼるものである。

このような異なる社会秩序同士の関係については、漢代における爵制的秩序と年功序列（しんい 齒位）の関係や（西嶋 1961）、爵制的秩序と家族的秩序の関係（尾形 1979）、あるいは魏晋南北朝時代における血縁的秩序と地縁的秩序の二項対立的関係に関する先駆的研究があるが（中村 2013a）、筆者はそのような社会秩序を形づくる「つながり」のさらなる複数性に注目し、そのなかに生きた個々人のありようを考えたい。これは、従来のモデル（図1-3）の否定ではなく、むしろ発想の転換に基づく視点の変更である。

この視点からみると、諸個人は複数の種類の「つながり」に帰属し、時と場に応じてそれらの優先順位を決め、そのどれかに適宜帰属意識をみいだしていたものと考えることができる。このような考え方はノーベル経済学賞受賞者のアマルティア＝センのアイデンティティ論とほぼ合致する（Sen 2006）。つまり、たとえば現代の「中国人」や「ムスリム」に多種多様な価値観のもちぬしが含まれるのと同様、中国古代の郷里社会にも帰属意識を異にする多様な人びとが混在していたと想定されるのである。すると、「つながり」の複数性とその種類・組み合わせを把握し、そのなかで複数の「つながり」を生き抜こうとする個々人の生き様に着目することが、彼らの息吹を感じとる鍵になろう。ここに「つながりの歴史学」の第二課題が看取かんしゆされる。

5. 歴史学の可能性③——「つながり」と国家の関係

第三に、さまざまな規律とそれに基づく複数の「つながり」のうえに、一体いかに国家が成り立ちうるのかが問われる。すでに紹介したように、そもそも中国に皇帝を頂点とする専制国家体制が生まれた理由と、その体制が反復・維持された理由は、戦後日本歴史学界最大の争点のひとつであった。だが、研究者の視点が共同体や地域社会に移るにつれ、その問題はやや等閑視されるようになり、専制国家は地域社会がいきざいに外在する与件よけんとして捉えられてきたごとくである（山本 2002）。とはいえ、それが世界史における中国史の特徴である以上、複数の「つながり」の存在を視野におさめ（歴史学の可能性①）、そのなかで生きる個々人を扱うだけでなく（歴史学の可能性②）、そのなかから豪族・貴族・士大

夫、ひいては至上無二の皇帝権力が出現・消滅する因果関係と、それが各種の「つながり」に与える影響を別途説明できなければならない。

そこで複数の「つながり」の共存・競合関係を前提として、この問題を考えてみると、ある人物が特定の「つながり」の規律（たとえば任侠）のなかで良好な位置を占めていたとしても、それだけで彼が皇帝に取って代わることは困難であることが想定される。なぜなら、単一の「つながり」の規律を支配するだけでは、他の多くの「つながり」の規律を支配するきとくけんえきしや既得権益者に太刀打できないからである（本書第5章コラム）。その逆に、皇帝権力の維持には、皇帝による複数の「つながり」の規律に対する安定的支配が欠かせまい（本章コラム）。要するに権力闘争とは、各「つながり」内でのヘゲモニー覇権争いにとどまらず、複数の「つながり」の規律をめぐる争奪戦でもあったと考えられるのである。この観点から専制国家・皇帝権力の盛衰を事例ごとに検討することが、第三の課題となろう。

||||||| まとめ

本章では、中国古代社会の人びとの「つながり」に着目し、それを主題とする先行研究を整理・紹介した。そのうえで私見を提示した。

それによると、戦後日本の中国史研究は停滞史観批判を軸に、皇帝と豪族・小農民、豪族と小農民・奴隸・農奴等々のあいだに支配—被支配関係をみいだす唯物史観的分析が主流であった。だが京都学派を中心に、中国古代社会の人びとの「つながり」に着目する研究が徐々に進展し、さらに清水盛光・増淵龍夫・宇都宮清吉などの研究を経て、1960年代には川勝義雄・谷川道雄の「共同体」論が生まれた。それには賛否両論あるが、のちに森正夫や岸本美緒の「地域社会」論に影響を与えた「共同体」論の背景には、当時の民間社会の「つながり」を解明せんとする意図が看取された。

本章ではこのような学説史の流れを吟味しつつ、第一に、戦国秦漢社会の「つながり」の具体的な内容解明を検討課題として掲げた。それは、たとえば中国古代の貨幣を媒介とする人間関係が具体的にどのようなもので、家族・任侠・爵位等に基づく他の人間関係とどう関係し、それが現代貨幣経済とどう異なるか



を問題視するものである。第二に、従来の郷里や県などの実体的共同体に着目する説や、特定の「共同体」・「地域社会」、あるいは「つながり」単体に焦点を絞り、その結合原理・生成過程・内部矛盾の解明をめざす説とは異なり、本章では中国古代に爵位・家族・貨幣・任侠などの多様な規律コードに基づく「つながり」の並存を想定し、それらの「つながり」に同時に帰属する個人のありようを問題視した。この観点によると、諸個人は複数の共同体に同時に帰属し、時と場に応じてそれらを取捨選択し、そのどれかに帰属意識アイデンティティをみいだす。これは、人種・宗教・文明・地域等々のどれかひとつの基準によって個々人の生活や価値観を判断するのがいかに危険かをしめす。第三に、複数の「つながり」のうえにどう国家が成り立っていたのかを検討課題として掲げた。それによると権力闘争とは各「つながり」内での覇権争いヘゲモニーであるだけでなく、複数の「つながり」をめぐる争奪戦をも意味し、複数の「つながり」を同時支配することが皇帝権力と国家の安定をもたらすと考えられる。以上をふまえて第5章では、とくに第二課題に関する事例研究を通じて、戦国時代末期の一女性の生の息吹を感じとってみたい。また第三課題に関してはコラムを御覧いただければと思う。

註

- ▶ 1 清朝考証学やランケ史学には実証の強調以外にも各々の特徴や思想的背景があった（濱口 1994, Iggers 1996）。清朝考証学と京都学派の内藤湖南の関係や、ランケ史学が東京帝国大学に導入された経緯については、Fogel (1984)、Mehl (1997)、中見 (2006) などが参考になる。
- ▶ 2 江戸明治期の対中国認識については松本 (2011) や板野 (2013) が参考になる。なお「脱亜」といえば福澤諭吉「脱亜論」が有名だが、平山 (2004, 2012) は福澤の脱亜思想（排儒教の主張）と論説「脱亜論」を区別し、戦前日本での論説「脱亜論」の影響力は実際には低く、福澤自身がアジア蔑視観を抱いていたかも疑問とし、以後論争があるので注意を要する。この点は小山俊樹氏（帝京大学）に御教示いただいた。
- ▶ 3 谷川自身、「共同体論争は80年代のはじめにまで及んだが、大局的には70年代後半には終熄した」とする（谷川 1987）。その後、川勝・谷川「共同体」論を培養した搖籃的存在だった中国中世史研究会自体が方向転換をはじめ、愛宕等 (1995) は「我々は必ずしもそれ〔柿沼注一豪族共同体論〕を全面的に肯定して共通の柱に据えるものではない。「豪族共同体」論における精神主義を強調する立場に対して、我々の一部ではやや違和感を覚えたこと、同時に「豪族共同体」論に集約し切れない多様にして広範な課題の存在を強く意識するからである」と宣言するに至っている。
- ▶ 4 谷川 (1992) は1980年代以降の研究の個別分散化を嘆く。谷川 (2009) は秦漢帝国成立期に官が国家運営に携わり、民が労役と生産物を提供する前代以来の階級的分業体制が継承されると

同時に、官民間で出身家族による身分的区別が消失した点を主張し、里のフラット性を重視する姿勢を維持する。

- ▶ 5 飯尾（1985b）は戦国秦における里人間の格差の存在を前提とし、国家が秩序安定のために主体的に里人同士の格差是正を図ったとする。渡邊（1986、2010）は、漢～唐が小経営生産様式（生産過程内に明確な分業・協業を含まず、分散した生産手段のもとで孤立的に営耕する分田農民の生産様式）を基盤とし、国家的土地所有（国家による土地の附与・没収の有無にかかわらず、国家が土地経営上の剰余生産物を採取）をし、秦漢社会が富豪・中家・貧家三層よりなる非フラット社会で、一部の富豪層以外は土地名有（世襲的占有）段階に至るも私的土地所有段階に至らず、阡陌制崩壊（後漢末）後に変化し、唐宋変革期に国家的農奴制段階から私的土地所有段階へ移行したとする。両者の行論はまったく異なるが、「フラットな里」に批判的な点は共通する。
- ▶ 6 以下の論述は Luhmann（1984）の影響を受けている。ただしルーマン理論自体は難解で、その解釈をめぐる多岐にわたる論争があるので、私見がルーマン理論自体と厳密に一致するか否かはここでは問わない。ルーマン理論に関する日本語文献には馬場（2001）以降、長岡（2006）、佐藤（2008）などがある。

※本章はりそなアジア・オセアニア財団の2014年度調査研究助成（課題「中国南北朝時代の貨幣経済と周辺諸地域」）による成果の一部でもある。

参考文献

- 東浩紀・濱野智史編『ised 情報社会の倫理と設計』（河出書房新社、2010年）
- 飯尾幸秀「中国古代の家族研究をめぐる諸問題」（『歴史評論』第428号、1985年 a）
- 。「中国古代における国家と共同体」（『歴史学研究』第547号、1985年 b）
- 飯田祥子「秦漢人民支配形態論の再検討序説——時期的変遷と地域的差異を視野にいれて」（柴田昇編著『『漢書』とその周辺——秦漢文献資料研究』崑崙書房、2008年）
- 池田雄一『中国古代の聚落と地方行政』（汲古書院、2002年）
- 井上忠司『「世間体」の構造 社会心理史への試み』（講談社、2007年）
- 宇都宮清吉『漢代社会経済史研究（補訂版）』（弘文堂書房、1967年）
- 。「中国古代中世史把握のための一視角」（『中国古代中世史研究』創文社、1977年）
- 尾形勇『中国古代の「家」と国家』（岩波書店、1979年）
- 奥崎裕司『中国史から世界史へ 谷川道雄論』（汲古書院、1999年）
- 愛宕元・気賀沢保規・東晋次「まえがき」（中国中世史研究会『中国中世史研究続編』（京大学術出版会、1995年）
- 岡崎文夫『魏晋南北朝通史（再版）』（弘文堂、1954年）
- 越智重明「魏西晋貴族制論」（『東洋学報』第45巻第1号、1962年）
- 小尾孟夫「貴族制の成立と性格——その研究史的考察」（今堀誠二編『中国へのアプローチ——その歴史的展開』勁草書房、1983年）
- 柿沼陽平『中国古代貨幣経済史研究』（汲古書院、2011年）
- 。「日本の中国出土簡帛研究論著目録（1910—2011年）」（『簡帛研究』2011・2012年号、広西師範大学出版社、2013年）
- 。「中国古代の貨幣 お金をめぐる人びとと暮らし」（吉川弘文館、2015年）
- 加藤常賢『支那古代家族制度研究』（岩波書店、1940年）



- 川合安『南朝貴族制研究』（汲古書院、2015年）
- 川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』（岩波書店、1982年）
- 『中国人の歴史意識』（平凡社、1993年）
- 川勝義雄・谷川道雄「総論」（中国中世史研究会編『中国中世史研究』東海大学出版会、1970年）
- 小嶋茂稔「戦後日本の中国古代国家史研究——後漢時代史研究の視点から」（『漢代国家統治の構造と展開』汲古書院、2009年）
- 『漢魏交替と「貴族制」の成立をめぐって』（『歴史評論』第769号、2014年）
- 菊池英夫「1970年回顧と展望 魏晋・南北」（『史学雑誌』第80巻第5号、1971年）
- 岸本美緒「モラル・エコノミー論と中国社会研究」（『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997年）
- 『序』（『明清交替と江南社会』東京大学出版会、1999年）
- 『中国中間団体論の系譜』（『岩波講座「帝国」日本の学知』第3巻東洋学の磁場、岩波書店、2006年）
- 『時代区分論』（『風俗と時代観 明清史論集1』研文出版、2012年 a）
- 『市場と社会秩序』（『地域社会論再考 明清史論集2』研文出版、2012年 b）
- 『「市民社会」論と中国』（『地域社会論再考 明清史論集2』研文出版、2012年 c）
- 木全徳雄「中国古代中世史把握の視点と方法をめぐって」（『歴史科学』第33号、1970年）
- 桑原隲蔵「中国の孝道」（『桑原隲蔵全集』第3巻、岩波書店、1968年）
- 小寺敦「先秦家族史および隣接諸分野研究の展望——婚姻史を中心として」（『先秦家族関係史料の新しい研究』（汲古書院、2008年）
- 子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか』（藤原書店、2003年）
- 五井直弘「中国古代史と共同体——谷川道雄氏の所論をめぐって」（『中国古代の城郭都市と地域支配』名著刊行会、2002年）
- 佐藤俊樹『意味とシステム ルーマンをめぐる理論社会学的研究』（勁草書房、2008年）
- 塩沢由典『市場の秩序学』（筑摩書房、1998年）
- 重田徳「封建制の視点と明清社会」「中国封建制研究の方向と方法——六朝封建制論の一検討」（『清代社会経済史研究』岩波書店、1975年）
- 柴田登「戦国史研究の視角——諸子百家と戦国時代の「国」をめぐって」（『名古屋大学東洋史研究報告』第18号、1994年）
- 清水泰次「支那史上の相互扶助について」（『経済学商業学国民経済雑誌』第31巻第2号、1921年）
- 清水盛光『中国郷村社会論』（岩波書店、1951年）
- 鈴木俊・西嶋定生編『中国史の時代区分』（東京大学出版会、1957年）
- 鈴木直美「中国古代家族史研究の現状と課題」「中国古代家族史研究——秦律・漢律にみる家族形態と家族観」（刀水書房、2012年）
- 全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集』（山川出版社、2014年）
- 竹内好「日本人の中国観」（『竹内好評論集 日本とアジア』第3巻、筑摩書房、1966年）
- 多田洞介『漢魏晋史の研究』（汲古書院、1999年）
- 榎身智志『漢代二十等爵制の研究』（早稲田大学出版部、2014年）
- 田中正俊「中国の変革と封建制研究の課題（一）」（『歴史評論』第271号、1972年）
- 『「アジア社会停滞論批判の方法論的反省」（『中国近代経済史研究序説』東京大学出版会、1973年）
- 谷川道雄『中国中世社会と共同体』（国書刊行会、1976年）
- 『中国中世の探求 歴史と人間』（日本エディタースクール出版部、1987年）

- 、「日本における魏晋南北朝史研究の回顧」(『中国史学』第2巻, 1992年)
- 、「『共同体』論と六朝郷里社会——中村圭爾氏の疑念に答える」(『東洋史苑』第54号, 1999年)
- 、「中国国家論序説——階級と共同体」(『名古屋大学東洋史研究報告』第33号, 2009年)
- 谷川道雄編『戦後日本の中国史論争』(河合文化教育研究所, 1993年)
- 津田左右吉「シナ思想と日本」(『津田左右吉全集』第20巻, 岩波書店, 1965年)
- 都筑晶子「六朝貴族研究の現況——豪族・貴族・国家」(『名古屋大学東洋史研究報告』第7号, 1981年)
- 鶴間和幸「秦帝国史研究と地域」(『秦帝国の形成と地域』汲古書院, 2013年)
- 富永健一『行為と社会システムの理論』(東京大学出版会, 1995年)
- 中見立夫「日本的「東洋学」の形成と構図」(『岩波講座「帝国」日本の学知』第3巻東洋学の磁場, 岩波書店, 2006年)
- 内藤湖南「概括的唐宋時代観」(『内藤湖南全集』第8巻, 筑摩書房, 1969年)
- 、「支那論」(『内藤湖南全集』第5巻, 筑摩書房, 1972年)
- 長岡克行『ルーマン／社会の理論の革命』(勁草書房, 2006年)
- 中村圭爾「貴族制社会における血縁関係と地縁関係」(『六朝政治社会史研究』汲古書院, 2013年 a)
- 、「六朝貴族制論」(『六朝政治社会史研究』汲古書院, 2013年 b)
- 、「日本における魏晋南北朝史研究」(『六朝政治社会史研究』汲古書院, 2013年 c)
- 西嶋定生『中国古代帝国の形成と構造』(東京大学出版会, 1961年)
- 、「中国古代帝国形成の一考察——漢の高祖とその功臣」(『中国古代国家と東アジア世界』東
京大学出版会, 1983年 a)
- 、「古代国家の権力構造」(『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会, 1983年 b)
- 旗田巍『中国村落と共同体理論』(岩波書店, 1973年)
- 馬場靖雄『ルーマンの社会理論』(勁草書房, 2001年)
- 濱川栄「秦・漢時代の庶民の識字」(『史滴』第35号, 2013年)
- 濱口富士雄『清代考据学の思想史的研究』(国書刊行会, 1994年)
- 坂野潤治『近代日本とアジア』(筑摩書房, 2013年)
- 東晋次「秦漢帝国論」(谷川道雄編著『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所, 1993年)
- 平山洋『福沢諭吉の真実』(文藝春秋, 2004年)
- 、『アジア独立論者 福沢諭吉——脱亞論・朝鮮滅亡論・尊王論をめぐって』(ミネルヴァ書房,
2012年)
- 福本勝清「アジア的生産様式論争史——戦前日本編」(『明治大学教養論集』通巻351号, 2002年)
- 藤家禮之助「中国古代中世社会の考察」(『漢三国兩晋南朝の田制と税制』東海大学出版会, 1989年)
- 藤田勝久「戦国秦漢地域史の研究」(『中国古代国家と郡県社会』汲古書院, 2005年)
- 堀敏一「中国古代史と共同体の問題」(『駿台史学』第27号, 1970年)
- 、「コメント多田狷介『戦国・秦漢期における共同体と国家』」(『史潮』新2号, 1977年)
- 牧野巽『牧野巽著作集』第1巻(御茶の水書房, 1979年)
- 増淵龍夫『新版 中国古代の社会と国家』(岩波書店, 1996年)
- 松本三之介『近代日本の中国認識 徳川期儒学から東亜協同体論まで』(以文社, 2011年)
- 松本善海「旧中国社会の特質論への反省」(『東洋文化研究』第9号, 1948年)
- 、「旧中国国家の特質論への反省」(『東洋文化研究』第10号, 1949年)
- 、「中国史における国家と社会との対立」(『中国村落制度の史的研究』岩波書店, 1977年)
- 宮崎市定「游侠に就て」(『宮崎市定全集5 史記』岩波書店, 1991年)



- 初山明「漢代豪族論への一視覚」(『東洋史研究』第43巻第1号, 1984年)
- 森正夫「中国前近代史研究における地域社会の視点——中国史シンポジウム「地域社会の視点——地域社会とリーダー」基調報告」(『森正夫明清史論集』第3巻, 汲古書院, 2006年)
- 諸橋徹次「支那の家族制」(『諸橋徹次著作集』第4巻, 大修館書店, 1975年)
- 山本進「明清時代の地方統治」(『明清時代の地方統治』創文社, 2002年)
- 横山寿世理「一人ぼっちは本当に怖いのか——2012年大学生調査結果より」(『聖学院大学論叢』第27巻第1号, 2014年)
- 吉澤英成「交換と経済学」(『貨幣と象徴』筑摩書房, 1994年)
- 好並隆司『秦漢帝国史研究』(未来社, 1978年)
- 葭森健介「中国史における貴族制研究に関する覚書」(『名古屋大学東洋史研究報告』第7号, 1981年)
- 渡邊信一郎『中国古代社会論』(青木書店, 1986年)
- 『中国古代の財政と国家』(汲古書院, 2010年)
- 渡辺正宏「中国史における封建制理論の再検討」(『岐阜県社会科研究会〈高校〉会報』第9号, 1970年)
- Dirlik, Arif, *Revolution and History: The Origins of Marxist Historiography in China, 1919-1937* (Berkeley: University of California Press, 1978)
- Fogel, Joshua A, *Politics and Sinology: The Case of Naito Konan, 1866-1934* (Cambridge: Harvard East Asian Monographs, 1984) 井上裕正訳『内藤湖南——ポリティックスとシノロジー』(平凡社, 1989年)
- Iacoboni, Marco, *Mirroring People: The New Science of How We Connect with Others* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 2008) 塩原通緒訳『ミラーニューロンの発見「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学』(早川書房, 2011年)
- Iggers, George, *Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1993) 早鳥瑛訳『20世紀の歴史学』(晃洋書房, 1996年)
- Luhmann, Niklas, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie* (Frankfurt: Suhrkamp, 1984)
- Marx, Karl, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band13 (Berlin: Dietz, 1961, original printed in 1859) 杉本俊朗訳「序文」『マルクス=エンゲルス全集第十三巻 経済学批判』(大月書店, 1964年)
- Mauss, Marcel, *Essai sur le don: Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques* (L'Année Sociologiques nouvelle série), 1925) 吉川禎吾・江川純一訳『贈与論』(筑摩書房, 2009年)
- Mehl, Margaret, *History and the State in Nineteenth-Century Japan* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 1997)
- Sen, Amartya, *Identity and Violence: The Illusion for Destiny* (New York: W. W. Norton, 2006) 大門毅監訳, 東郷えりか訳『アイデンティティと暴力』(勁草書房, 2011年)
- Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments* (London: Printed for A. Millar, in the Strand; and A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh, 1759) 村井章子・北川知子訳『道徳感情論』(日経 BP 社, 2014年)
- Tönnies, Ferdinand, *Gemeinschaft und Gesellschaft* (Leipzig: Fues, 1887) 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 純粋社会学の基本概念』(岩波書店, 1957年)
- Williams, Raymond, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society* (London: Harper Collins Publishers Ltd, 1983) 椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『キーワード辞典』(平凡社,

2011年)

Zak, Paul J., *The Moral Molecule: The Source of Love and Prosperity* (New York: Dutton Adult,

2012) 柴田裕之訳『経済は「競争」では繁栄しない』(ダイヤモンド社, 2013年)

Zelizer, Viviana, A. *Economic Lives: How Culture Shapes the Economy* (Princeton: Princeton University Press, 2011)

歴史研究編輯部編「堅持与発展唯物史観」(『歴史研究』2007年第1期)

羅新慧『20世紀中国古史分期問題論弁』(百花洲文芸出版社, 2004年)

陶希聖「編輯的話」(『食貨半月刊』第1卷第1期, 1934年)

楊振紅・徐歆毅「改革開放以来的秦漢史研究」(『文史哲』2010年第1期)

張広志『中国古史分期討論的回顧与反思』(陝西師範大学出版社, 2003年)

コラム 皇帝の悩みごと——矛盾する「つながり」を生きる

中国において皇帝や王朝が誕生しては滅び、それが二千年以上もくり返されたことは、まさに中国史の一大特徴であろう。ただし、その社会的基盤には宗族・貨幣・国籍・郷里(現住地・出身地)・性別・爵位・華夷の別などに基づく人間同士のさまざまな「つながり」があり、個々人はそれらの「つながり」のいくつか同時に帰属していた(第1章)。皇帝や王朝といえども、それらの「つながり」の一部に支配力を及ぼし得たにすぎず、民同士の「つながり」のすべてに介入できたわけではなかった(第5章コラム)。

そのなかでより多くの「つながり」の主導権を握った皇帝は、そうでない皇帝よりも、安定的な専制支配を実現できたとおもわれる。その反面、特定の「つながり」の規律(たとえば任侠)の主導権を握っただけの者が皇帝に取って代わるのは至難であった(第5章コラム)。なぜなら、単一の「つながり」の規律を支配するだけでは、他の多くの「つながり」の規律を支配する既得権益層に太刀打できないからである。それにもかかわらず、一介の民から奇跡的に皇帝にのぼりつめた人物のひとりが漢の高祖劉邦である。

劉邦の字は季で、父を劉太公、母を劉媪という。もとより季は末っ子、太公は父親、媪は婆さん程度の意味で、とても由緒正しい家柄とはおもえない。劉邦自身、若くして酒色を好み、50歳前後まで亭長(警察署長)にすぎなかった。だが彼は、次第に周田とのあいだに任侠的な「つながり」を構築し、資産家である呂氏との婚姻を通じて家族面・資金面での「つながり」をも獲得し、最終的には



陳勝・呉広の乱を契機として、徐々に皇帝への階段をのぼっていった。

皇帝となった彼は、爵位制度における事実上の最上位に位置し、かつ莫大な資金を有する存在となった。彼はもはや、若かりしころのように上爵者に頭を下げる必要もなく、頼みこんでツケで酒を飲む必要もない。だがその代わりに、権力におもねらない人びとの任侠的紐帯や、それ以前からの家族的紐帯が、今度は皇帝劉邦のありようと矛盾するようになっていった。

たとえば季布は、もと西楚霸王項羽の部下で、民間で信頼に足る大任侠としても知られていた。かつての劉邦ならば、報仇を旨とする任侠の心性に従い、仇敵の季布を殺害したはずである。現に劉邦は、天下統一後に逃亡した季布を血眼でさがした。だが、著名な任侠季布を私怨で殺せば、天下に己れの狭量さをしめすことになるため、劉邦は結局季布を赦さざるを得なかった。劉邦は、民間における任侠間の「つながり」を恐れたのである。

だが劉邦の周囲には他にも多くの任侠がいた。劉邦の挙兵以来の部下は、もともと劉邦と任侠的「つながり」で結ばれていた者が多かった。彼らは天下統一後も態度を改めず、酒を飲むと功績を言いあい、酔っ払って怒号を発し、殿中の柱に切り付けるほどだった。至上無二の支配者となった劉邦にとって、これは看過できない問題である。そこで叔孫通らが作成した礼儀・秩序を適用したところ、上下関係は整然と定まった。それをみた劉邦は、「わしは今日はいじめて皇帝の貴さを知った」と言ったという。

劉邦と家族との関係も微妙である。本来劉氏の家では、末っ子でだらしのない若き劉邦を父や兄が叱るのが常で、兄嫁さえ劉邦に辛く当たっていた。劉邦が皇帝となっても、家族間の感情的な関係は容易に変わらない。たとえば劉邦は、天下統一後もなお五日に一度、「家人の礼」に基づいて父の太公に挨拶をしていた。これが劉家のならいだった。だが、「天に二日なく、土に二王なし。今、皇帝陛下は太公様のご子息ではございますが、人主でもあります。太公様は父ではございますが、皇帝陛下の臣下でもあります。このままでは秩序が壊れてしまいます」との進言を部下から受けた太公は、以後、臣下の礼に基づいて劉邦に拜謁するようになった。なるほど、皇帝が史上無二な存在である以上、家族の「つながり」は二の次とならざるをえない。だが、これは子の劉邦としては気まずいことである。そこで劉邦は、父の顔を立てるためにも、あらたに「太上皇」という皇帝以

上の位を設けて太公に与え、君臣関係と親子関係を一致させることに腐心した。

このような君臣関係と家族関係の矛盾は、その後も数々の皇帝や王を悩ませつづけた。身分は違えども、親は親、子は子であるが、君臣関係に私情をもちこめば、国家の秩序を乱すことになる。たとえば齊悼惠王 劉 肥が異母弟の恵帝と宴会を開いたとき、劉肥は恵帝の臣下にすぎなかったが、両者はなお兄弟として接し合った。そのため恵帝の母の呂太后は激怒し、劉肥を誅殺しようとした。後漢末期の曹操も、烏丸討伐へ息子曹彰を派遣するにあたり、「家では父子関係だが、一度公的な仕事についたら君臣関係になるぞ」と言い、ひとたび任地に赴く以上、曹彰を我が子でなく家臣として扱わざるをえないと警告している。

以上の例は、じつは「公・私」の問題に還元しえない複雑さをもつ。なぜなら、実際の「つながり」とその規律はさまざまで、皇帝も家臣も時と場に応じてそれらを使い分けねばならなかったからである。そのことをしめす一例として、戦国時代のつぎの議論に注目される（戦国 縦 横家書）。

ある人が燕王にこういった。（中略）「私が曾参のように孝で、尾生のように信で、伯夷のように廉ならば王は満足でしょうか」と。王が満足だと答えると、この人は「それなら私は王に仕えません。なぜなら、もし孝なら親を離れるわけがないので、私は国の益となりません。信なら人を欺くことがないので、国の益となりません。廉なら盗むことがないので、国の益となりません。思うに、信と仁は両立せず、義と王は両立しません」と述べた。王が「では仁義は不必要か」と問うと、「むろん、必要です。仁なくして人は成立せず、義なくして王は存立しえませんが、仁・義はともに私のための行為であって、人のための行為ではありません」と答えた。

このように中国古代には、「つながり」にまつわるさまざまな規律があった。劉邦をはじめとする歴代皇帝は、至上無二の権力に即位後も、帝位に安住することなく、結局日々こうした人間関係に頭を悩ませつづけざるをえなかったのである。

つながりの歴史学

2015年10月5日 初版第1刷発行

編著者 本田 毅彦

発行者 木村 哲也

定価はカバーに表示 印刷 新灯印刷／製本 新灯印刷

発行所 株式会社 北樹出版

〒153-0061 東京都目黒区中目黒1-2-6

URL : <http://www.hokuju.jp>

電話(03)3715-1525(代表) FAX(03)5720-1488

© 2015, Printed in Japan

ISBN 978-4-7793-0473-6

(落丁・乱丁の場合はお取り替えます)